

第七号に寄せて

吉見 孝夫

第七号をお届けします。前号で年二回発行を豪語しながら、一年が経ってしまいました。己を縛るために、次号は九月に出すと、今から予告しておきます。

今号で扱ったのは、古活字本『伊曾保物語』中の無刊記第二種の系統の卷子本、及びその卷子本に基づく明治期の単行本です。遠藤潤一氏の第二種本のご研究に頼るところ大です。

前号にもいくつかのご教示を賜りました。お礼申し上げます。

小堀桂一郎、中務哲郎のご両所からは資料に関する情報をご提供いただきました。

山西正子氏は、ご勤務先の目白大学大学院の留学生に尋ねたところでは、国によってよく知っているイソップ寓話が異なるようだと言っていました。例えば中国では、凍えているところを農夫が助けた蛇が農夫の子を殺してしまう（あるいは農夫自身を殺す）話がよく知られているそうです。そういえば、「アリとキリギリス」がブラジルの絵本ではアリがキリギリスを迎え入れ、一緒に踊って冬を過ごす結論になっているそうです（『朝日新聞』二〇一五年一月七日「オピニオン」八木啓代）。

こういった事実には興味を惹かれます。ただ、短絡的な比較文化論を展開して「ナントカ人はナニナニ的だ」と断定するのは浅薄なだけでなく、危険でもあります。そういう底の浅い、かつ誤りの多い言説の一つを、花間隆氏のインターネットサイト「イソップの世界」が綿密な調査で論駁しています。閲読をお勧めします。

国民性の問題ではありませんが、こんな経験がありました。私が留学生と接した限りでは、ヨーロッパは無論、南北アメリカ、アジアの学生も「イソップ」の名は知っています（アフリカの学生のことばかりません）。ところがフランス語を母語とするスイス人の学生が知らないというのです。いくつかイソップ寓話を話すと、それはラ・フォンテーヌだということです。確かに一七世紀にラ・フォンテーヌがイソップ寓話を詩にしていますが、本家のイソップの名が忘れられているのには驚きました。ただしこれもスイス人に一般化するわけにはいかないでしょう。

時代思潮がイソップ理解に影響するということもあります。吉田松陰がイソップ寓話を読んで、ヨーロッパ人への警戒を喚起したのはその例と言えるでしょう。また、

国定教科書で一九一八年（大正七年）から使われた第三期にのみ「北風と太陽」が採られたのは、大正デモクラシーと無関係ではないと思っています。その大正デモクラシーの指導者、吉野作造は新村出も持っていない本を所有していました。詳しくは本号の論文をお読みください。

テレビ朝日の「ヤーマス」という番組からイソップ寓話について話せという依頼がありました。収録の一週間前という余りに急な連絡で、どうやらどなたかが断った後で私にお鉢が回ってきたのではないかとにらんでいます。昨年一月一九日の深夜の放送ですので、ご覧になった方は少ないでしょう。

第五号では金沢市の前田土佐守家資料館所蔵の「影模絵入蘭文伊曾保物語断簡」に関する小論をものしました。その後、この資料に関する論文が二本既にあつたことを知りましたので、ここに補います。いずれも著者は菅野陽氏です。

○「江戸期伝来の美術関係蘭書二種―下―」（『古美術』第五四号、一九七七年一月）

○「寛政三年に模写された蘭書動物寓話集の銅版画」（『大和文華』第七七号、一九八六年）

前者は、「断簡」の原本 *Vorsteltje Warande der Dieren* を見、また *Edward Hodnett* の *Marcus Gheeraerts the elder of Bruges, London, and Antwerp* を読んだうえでの論考です。また後者では「断簡」を実際に見ています。「断簡」中のオランダ語文の要約も載っています。菅野氏は銅版

画史の研究者であるだけでなく、銅版画の実作者でもあり、私とは関心の赴くところが少し異なります。とはいえ、小論で述べたうち、*Hodnett* の図書に依拠した部分のかなり（全てではありませんが）は既に指摘されています。調査に遺漏のあつたこと、恥じ入ります。

裏表紙の図は、数年前に学生が卒業記念として私に贈ってくれた紙細工です。イソップ寓話集から動物たちが飛び出す絵柄です。